

北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association

＜北海道熊研究会 会報＞ 第79号 2017年 12月 24日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～78号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

「北海道熊研究会」 Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜熊類の起原と進化＞ 第3報

本稿を記すに当たり、特に次の3書を参照した。①A Riview of Fossil and Recent Bears of the Old World(Erdbrink, D. P.1953)、②The Cave Bear Story(Bjorn Kurten, 1976)、③The Pleistocene(Tage Nilsson, 1983)。特に①は、熊類研究の原典である。

＜ホラアナグマ＞

この項は、初読者の為に、前報78号と前半が重複しています。

洞穴熊は北極熊や熊やかつて北米に居たアルクトゥス熊「Arctodus は初期の Protursus の出現前後に別の属として出現したらしい」とともに熊類の中では身体が最も大形の熊で、骨格から外貌を復元すると熊と共に最も熊らしい風格をしている熊で、出土した頭骨や四肢骨から雄は雌よりも大きく、熊に比べて3割程身体が大きかったと考えられている。越冬を洞穴で過ごし出産し育子したため化石骨が主に洞穴から出土するので「洞穴熊」を意味する学名 *Ursus spelaeus*(spelaeus スペラエウス、ラテン語で「洞穴の」義)が付された。熊は太古から冬ごもりは通常土穴を掘って籠ったのに対し、洞穴熊は既存の洞穴を使う習性があり、そのために洞穴内で死亡することもある。長年月の間に同じ洞穴に多数の死骸が集積される結果となり、それが後に洞穴から多数の本種の化石が出土する理由となった。具体的に言えば、熊は孤独性が強いから、広い洞窟でも中に集団で居ることはなく、居るのは単独か母子のいずれかである。洞窟で2～3年に1頭このような熊が死んだと仮定し、そう言う状態が数万年ないし10万年続いたとすれば、死骸は3万から5万頭分にもなる。それが洞穴内に洞穴熊の化石が多い理由だと言う。本種の最古の化石は約30万年前のもので、化石は北緯36°～52°のイギリスからカスピ海以西部のドイツ・フランス・イギリス等欧州から広く石灰岩洞窟や石灰岩層から出土している。骨や昆虫を食べるコウモリ類の糞にはカルシウムや磷が多く含まれており、第1次大戦中には農業用リン酸肥料目的で洞窟が掘ら

れ 3 万～5 万頭もの洞穴熊の骨が堆積したコウモリ類の糞と共に採掘され、洞穴熊の骨の堆積層の下からは、洞穴熊の祖型種である *U. deningei* 熊の化石が出土したと言う (T. Nilsson)。クルテン博士によると、食性は熊に似た雑食性で、新生子はドブネズミ程の大きさ、満 1 歳は狼ぐらい、満 2 歳はハイエナ程、満 3 歳はライオン程の大きさだったと言う。出産期は 11 月～翌年の 2 月だろうと言う。洞穴熊は 1 万年程前に絶滅したが、絶滅原因は内因と外因があるが、Abeel と Kyrle は内因説をとり、種としての退化、雄雌の比率の異常化(雌の減少)、骨疾患、奇形などをあげている。祖型種の *U. savini*、*U. deningei* も分布がヨーロッパにのみ限局し、しかも出現して 30～40 万年で絶滅していることから考え、その末裔進化種である洞穴熊は前 2 種も含めて環境変化に対する適応性が小さかったことが推測され、過去のミンデルン氷期後の温暖な間氷期を耐え抜いて来たにも拘わらず、ヴルム氷期末期以降の温暖化にはとうとう適応出来ず、種々の内因外因の影響で徐々に個体数を減少させ、ついに絶滅に至ったものと思う。なお同時期には、本州以南に棲息していた熊も絶滅したが、熊は北半球に広く棲息していて、はるかに洞穴熊より、環境への適応性は大きいはずだがやはり耐え得ず絶滅したものである。死んだ季節は歯の最外側年輪が冬期の寒冷な時期のものか、それ以外の温暖な季節のものかを調べれば分かるはずだが、それに関する記述はないようだ。

<ヨーロッパの先史人と熊>

約 30 万年前から約 1 万年前に至る間、ヨーロッパには洞穴熊が棲息し、約 20 万年前からは熊も棲息していた。但し両種は越冬場所の違いなどの生態の違いから、越冬期以外の活動期においても棲み分け的生活をしていたらしい。この間のヨーロッパでは約 20 万年前から 2 万数千年前まで、ネアンデルタール人が棲み、約 4 万年前から 1 万年前まで、クロマニオン人が棲んでいた。これらの先史人は当然熊との出会いもあった。それを見てみよう。クルテンによると、旧石器人(クロマニオン人とその子孫)は熊の絵を洞窟の壁面などに 100 点ほど残しており、その殆どは熊のもので、洞穴熊のものは数点だろうと言う。その理由として、洞穴熊の生息地は人と洞窟熊が会う頻度が少ない人が容易に行けない場所で、例えそこで洞穴熊を獲るにしても、槍や撲殺用の殴り棒では太刀打ち出来ず、捕殺用の落とし穴を造るにも地形的に難しい場所であったのだろうと言う。また人が加工したと断定し得る熊の骨は総て熊のもので、洞穴熊の物は見つかっていないと言う。

ネアンデルタール人は弓と矢を知らなかった民族と言われているが、熊への関与に関する信頼性がある知見は 2 件ある。一つはフランスの先史学者 Eugene Bonifay の 1960 年代前半のあの有名な Lascaux からほど近い Regourdau cave の記述である。洞内にネアンデルタール人の墓があり、その供え物の中に熊の上腕骨(道具に用いたらしい)があり、他骨は故意と考えられる場所にまとめて在った。これについて、ラップ人が熊儀礼で頭骨と他の骨を一括して埋める事との関連で、ネアンデルタール人にも熊儀礼の観念が存在していたのではないかと述べている。もう一つはドイツの Weimon city 近くの石灰層からの出土化石で、熊の片側の下顎部で、犬歯の上半部が人為的に削り取られた物で、なぜその様に加工したのかは不明だが、これもネアンデルタール人による数少ない物的資料だと言う。

もう一つ先史人による熊儀礼の存在を推測させる実物に、1923 年に洞窟探検家の Norbert Casteret がフランスのピレネーの Montespan 洞窟で発見した長さ 1.2m 高さ 0.6m の熊の粘土製の頭部が無い彫像で、前足の間に若熊の頭骨が在ったと言うのも。しかし頭骨はその後盗まれ、熊か洞穴熊か解らぬままだと言う。推測として、彫像には熊皮が掛けられ、頭骨は頭の位置に立てた棒で固定され、熊の姿が再現された物であろうと言う。また彫像の面には沢山の槍で刺した痕があると言う。これらのことから、この彫像は熊儀礼の対象物であったらうとの事。しかし真偽は不明である。(了)